

## アメリカにおける体育カリキュラム論に関する研究

### —1960年代以降におけるカリキュラム・モデルの諸潮流の成立と展開—

#### 【論文要旨】

本研究は、1960年代以降のアメリカにおける体育カリキュラム論に関する研究である。本研究で対象とする体育（physical education）とは、運動・スポーツを教育内容・教材として児童・生徒に教育を行う、学校のカリキュラムの一部を指している。本研究では、特に体育カリキュラムの計画や設計に関する論点（目標設定、内容編成、活動の組織、評価方法など）を扱う。

1970年頃までのアメリカの体育において、依拠する教育的価値の異なる立場が大きく4つ示されてきた。それは、「身体の教育（education of the physical）」、「身体を通じた教育（education through the physical）」、「運動教育（movement education）」、「遊びの教育（play education）」である。それぞれの立場は、①筋力や器官の発達など体の生理的側面の教育を重視する立場、②身体活動を通じた全面的な発達、とりわけ性格や社会性などの教育に目を向けることを重視する立場、③動きの探究や運動による自己表現を重視する立場、④身体活動での精神状態に着目し、運動遊びの教育を重視する立場に整理できる。

これらの立場は、1960年代から1970年代を経て、1980年代以降の体育論にも直接的・間接的に影響を与えている。また、直接的な影響関係になくとも、体育の教育的価値を同じように捉える立場が見られる。具体的には、「フィットネス教育（fitness education）」、「身体活動を通じた責任の指導（teaching responsibility through physical activity）」と「冒険教育（adventure education）」、「技能のテーマ（skill theme）」、「スポーツ教育（sport education）」などの形で、体育カリキュラムが展開されている。運動・スポーツの多様な教育的価値をどのように体育カリキュラムへと具体化するかという課題は、アメリカの体育論において2000年代以降にも続く課題となっている。

また、1960年代以降のアメリカにおいては、各々の教育的価値に依拠して立場が分化していくとともに、多様な教育的価値の見方を包括するような体育カリキュラムの枠組みを作る試みもなされてきた。代表的な試みとしては、1963年のブラウン（Brown, C.）らによるヒューマン・ムーブメント（Human Movement）に依拠した体育論、1977年にジュエット（Jewett, A. E.）らが示した「目的—プ

プロセスによるカリキュラムの枠組み（PPCF: Purpose Process Curriculum Framework）」、ルンド（Lund, J.）らによる「スタンダードに基づく体育（Standards-based Physical Education）」が挙げられる。とりわけ「スタンダードに基づく体育」では、フィットネス教育や冒険教育、スポーツ教育などのテーマを持つ個別の体育カリキュラム・モデルを併用する「複数モデルのカリキュラム（multimodel curriculum）」という考え方が示されている。これらの包括的な枠組みを構築する試みもまた、1960年代以降のアメリカにおける体育カリキュラム論の展開の特徴となっている。

本研究は、以上のようなアメリカでの展開に即して、（1）4つの立場に位置づく論者が、それぞれの教育的価値を実現するためにどのように体育カリキュラム論を展開してきたのか、（2）それぞれの立場の体育カリキュラム論の特質と課題は何か、（3）包括的な体育カリキュラムの開発の試みはどのように展開してきたのかという問いを追究するものである。

日本の先行研究においては、フィットネス教育、責任指導論、体育のスタンダードの構成、スポーツ教育の展開が検討されてきた。また、運動教育の先行研究など各系譜の体育論の研究や、アメリカにおける体育の評価論の展開に関する研究もなされている。しかし、これらの先行研究の課題として、次の3点を挙げることができる。第一に、1つの立場の体育カリキュラム論の成立・展開の過程に着目する傾向にあり、それぞれの立場の相対的な位置づけを描き出すという点では不十分である。第二に、体育カリキュラムの開発と設計をめぐる論点についての検討が十分になされていないことである。第三に、1つの立場の体育論の利点を主張する傾向があり、「複数モデルのカリキュラム」など、多様な教育的価値を包括するような体育カリキュラム設計論の位置づけが十分に明らかにされていない点である。

アメリカにおいては、シーデントップ（Siedentop, D.）やジュエットなどの論者によって、多様な体育カリキュラム・モデルの存在が繰り返し整理されてきた。しかしながら、これらの先行研究には、アメリカにおける体育カリキュラム論の諸潮流を構造的に捉えるための枠組みが十分に構築されていないという課題がある。アメリカの先行研究においては、どのモデルを取り上げるか、あるいはどのようにモデルを分類するかについての見解は十分に整理されてい

い。そして、そのモデルや系譜を取り上げる妥当性について十分に検討されないままに、その時代に台頭している体育カリキュラムを紹介する傾向にある。

これらの先行研究に対して、本研究は、アメリカにおける体育カリキュラム論を網羅的に整理するのではなく、諸潮流を構造的に把握するための枠組みを提示することを志向するものである。その上で、包括的な枠組みを構築する試みの特質と課題を検討することを目的とする。そのために本研究では、依拠する教育的価値の異なる4つの立場のそれぞれについて、体育カリキュラム論の成立・展開過程を整理する。また、個別の系譜だけでなく、包括的な体育カリキュラム開発の試みの歴史を整理する。加えて、2000年代以降の体育カリキュラム論の展開も対象とすることで、諸潮流において洗練されてきたカリキュラム設計と授業計画の方法を総合的に検討する。

本研究の構成は次の通りである。まず、依拠する教育的価値の異なる4つの立場に即して、フィットネス教育（第1章）、身体活動を通じた精神面での発達を重視する系譜（第2章）、運動教育（第3章）、スポーツ教育（第4章）のカリキュラム論の成立・展開過程を検討する。その上で、体育を包括するカリキュラムの枠組みを構築する試みについて検討する（第5章）。

これら序章から第5章までの検討をもとに、本研究では次の3つの視点から、1960年代以降におけるアメリカの体育カリキュラム論の展開を整理した。

第一に、依拠する教育的価値の異なる立場の位置づけを明らかにするために、2つの軸で構成される平面を提示した。1つ目の軸は、身体的・技術的価値を重視するか、情意的・人間関係的価値を重視するかという軸である。2つ目の軸は、手段的・外在的な価値を重視するか、（自己）目的的・内在的な価値を重視するかという軸である。この2つの軸に即して各論者の立場の位置づけを考えると、それぞれの立場を相対的に表すことができる。具体的には、フィットネス教育は身体的・技術的価値かつ手段的・外在的価値、責任指導と冒険教育は情意的・人間関係的価値かつ手段的・外在的価値、運動教育は身体的・技術的価値かつ目的的・内在的価値、スポーツ教育は情意的・人間関係的価値かつ目的的・内在的価値を重視する立場に位置づくと考えられる。

第二に、特定の教育的価値に依拠した個別の体育カリキュラム論の展開と、包括的な体育カリキュラム論を構築する試みの流れの区別である。1960年代に

は、個別の体育カリキュラム論が形成段階にあった一方で、ブラウンらは包括的な枠組みを提示した。1970年代から1990年代には、個別の体育カリキュラム・モデルが洗練されており、ジュエットらはPPCFをそれらのモデルと並ぶ一つのモデルとして提示した。そして、2000年代以降に提唱されているルンドらの「スタンダードに基づく体育」では、個別の体育カリキュラム・モデルを取り入れた設計が示されている。このように、個別の体育カリキュラムを構築する試みと、包括的な体育カリキュラムの枠組みを構築する試みは、従来は互いに並列される関係として捉えられていたが、その後、両者を二層で捉え、そのギャップをどのように埋めるかという方向も模索されてきたと整理することができる。

第三に、諸系譜における体育カリキュラム論の特質と課題の検討である。本研究では、それぞれの立場の代表的な論者・団体の所論を対象とし、体育カリキュラム論の成立・展開過程を整理し、その特質と課題を検討した。以下、各章の検討の要約である。

第1章では、コービン（Corbin, C. B.）の所論を中心に、フィットネス教育カリキュラムの成立・展開過程を検討した。フィットネス教育の代表的論者であるコービンは、1960年代から1970年代の体育論において、体力関連の目標を重視するとともに、体力に関わる問題解決の目標を示していた。しかし、コービンのカリキュラムには幅広い目標と活動から選択する方法が示されており、フィットネス教育としての特徴が十分に見られるわけではない。その後のフィットネス教育の議論では、短期的な体力向上ではなく長期的なフィットネスの改善の重要性、能力の獲得だけでなく能力の自覚の重要性、問題解決と自己管理スキルの重要性が示されるようになっていく。コービンらが提示した「生涯のフィットネス」にはこれらの議論が引き継がれている。初等学校のウェルネスウィークのカリキュラムでは、有酸素運動などのフィットネスと栄養に焦点を合わせつつ、日々のメッセージという形で一日の活動が組織されている。また、ミドルスクールのカリキュラムでは自己評価や問題解決に重点が置かれたテキストが作成されている。しかしながら、高次の問題解決という視点が単元設計のレベルで十分に構想されていない点と、高次の目標の達成と態度形成の関係性が十分に整理されていない点には課題があると考えられる。

第2章では、ヘリソン（Hellison, D. R.）の責任指導論と、冒険教育カリキュラムの成立・展開過程を検討した。ヘリソンの責任指導論と、冒険教育の議論においては、身体活動を通じた精神面の発達や社会性の育成が目指されてきた。この立場は必ずしもカリキュラム設計という発想に合わないところがあるものの、プロジェクト・アドベンチャー（Project Adventure）などにおいては体育における冒険教育カリキュラムが提示されている。冒険教育カリキュラムでは、「本質的な問い」とセクションによるスコープとシークエンスの設定や、認知面・技能面と組み合わせた振り返りを用いるなどの方法が提示されている。これらの方法には、信頼や対立の解決を軸としながらも、身体や動きの理解に即して情意形成を行うカリキュラム設計の在り方が提示されている。ただし、社会性の育成における認知面・技能面の位置づけ、およびそれらの関係性の構築については課題があると考えられる。

第3章では、運動教育カリキュラムの成立・展開過程を検討した。1960年代に台頭した運動教育では、スタンリー（Stanley, S.）に見られるように、ラバン（Laban, R.）の運動理論に基づいて体育の教育内容を分析する枠組みが提案された。しかしながら、運動の概念的な理解に偏重していることや、一般的な運動能力の蓄えを想定していること、そして単なる試行錯誤とは異なるシークエンスを十分に提示できていないことが批判された。その後、グレアム（Graham, G.）らが提示しているカリキュラムでは、ゲーム・体操・ダンスといった分類ではなく「技能のテーマ」と「運動の概念」という2つの視点からスコープとシークエンスを設定する方法が示されている。その上で、子どもがゲームや体操を創造する活動が構想されている。このようなカリキュラム設計によって、授業ごとに技能と概念の焦点を持ちつつも、体育の「知性化」とは異なる遊びの活動や応用課題を組織する方法が提案されている。また、子どもたちの多様な技能のレベルに合わせたカリキュラムと授業の設計が可能となっている。他方で、運動の概念の転移を意図的にもたらすための内容編成と、運動の探究の方法の育成については課題があると考えられる。

第4章では、スポーツ教育カリキュラムの成立・展開過程を検討した。「遊びの教育」として体育を規定したシーデントップは、とりわけ他者との相互関係や、仲間とのパフォーマンスの共有によって有能感や自己認識が育成されるこ

とを重視した。シーデントップにとって遊びは、人間に意味をもたらすものであり、同時に共同体を形成するための重要な手段でもあった。そして、より豊かな意味のあるルドゥスの運動遊びに参加するための教育として体育を意義づけた。この考えはスポーツ教育においてより一層鮮明となり、祭典性などに着目したスポーツの文脈の作成、個々人が責任を持つチームを主体とした単元展開というカリキュラム設計論となって表れている。スポーツ教育論においては、種目や運動技能以外のスポーツを規定する要素を分析するという形で、設定事項を提示している点に特徴がある。他方で、「スポーツ」の集団的・社会的な側面が強調され、運動遊びの概念が狭く捉えられている点、また特定のスポーツの文脈での学習内容をどのように他の単元へと転移させるかという点においては課題があると考えられる。

第5章では、包括的な体育カリキュラム論を構築する試みを検討した。ブラウンらの体育論では、ヒューマン・ムーブメントに基づいた知識分野が提示され、講義と実験をベースとした知的な学習が重視された。ジュエットらによるPPCFでは、個人的な意味の探究を実現するために、「目的の概念」と、「運動プロセスの分類」を用いた目標設定や活動の組織が提案された。ルンドラの「スタンダードに基づく体育」では、体育におけるスタンダードの使用、「真正の評価」論、「複数モデルのカリキュラム」という考え方が取り入れられ、スタンダードとモデルをリンクさせることでスコープとシーケンスを決定する方法が具体化されている。しかしながら、各モデルをスタンダードに当てはめてパッケージ化する危険性がある点には課題があると考えられる。

これらの検討を踏まえれば、個別の体育カリキュラムの開発と、それらのモデルを取り入れるメタ的で包括的な理論を構築するという「スタンダードに基づく体育」の方向で、体育カリキュラム論を展開することが重要になると考えられる。他方で、本研究の成果を踏まえると、個別の体育カリキュラムと包括的な枠組みの構築を進めるにあたって、それぞれ次の課題を指摘することができる。個別の体育カリキュラムについては、それぞれの系譜によって課題が異なるものの、単元設計および単元を超えた内容の転移という視点が重要になるという点は共通する課題として捉えることができる。包括的な枠組みの構築については、各モデルの依拠する教育的価値や、体育カリキュラムの特質と課題

を踏まえた上で、包括的な枠組みを再検討することが課題になると考えられる。これらの課題と関連して、4つの教育的価値を実現する包括的な体育カリキュラム論をどのように構想するかという課題が、本研究の今後の課題として挙げられる。